
Silent voice -声なき声-

Felicitas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Silent voice - 声なき声 -

【Nコード】

N9856W

【作者名】

Felicitas

【あらすじ】

一人の青年の学園生活を描いた、青春&オカルト物語。

「なんで解ってくれないんだッ！」

家の外にまで響きそうな声で叫ぶ、若い男の声。

「当然だろう、そのような不養成な学校なんぞ、私は認めん」

重く、威厳というものがそのまま乗っかっているかのような声で意義する、別の男。

「もう編入が決まっちまったんだし、お願いだよ！」

すすり泣くかのように儂く、弱く、しかし根気は根強い声を張り上げる。

「編入してしまったんなら転校すればいいだけの話だ。転校先の学校には既に連絡してある」

海面付近の小魚を丸呑みする鯨のように、重い声は若い男の声を飲み込む。だが、そこから脱出する小坂もまた必死に抗う。

「なんで一々親父が口出してくるんだよ！ 俺の問題だ！ 俺がどうにかする！」

「ふん、所詮出来ることは限られているし、意味がない。私はお前の身を案じているんだ」

この男たちの競い合いは、日常茶飯事ともいえる程の熱気を炊き上げる。

「だ、だったら！ 三ヶ月……いや、二ヶ月！ 二ヶ月だけでいいから行かせてくれ！ それで何も出来なかったら、親父の言うとおりにする！ なんでも言うことを聞く！」

執行猶予を主張し、一先ず安定期をつかみ取ろうとする若者。

「……分かった、二ヶ月だな。その間に行動し、成果を上げる。さもなくば、解っているな？」

若者の意図を理解したのか、下手に出る重い声。

「分かってる」

ふん、という言葉を残し電話が切れる。通話時間は5分足らず。

この5分は想像以上に短く感じ、あっという間であった。

通話の切れた後も若い男は受話器を握りしめ、握力でひびが入る音が部屋にこだまする。沈黙はより一層深まり家の外のバイクの音が聞こえる程。

「……やらなくちゃいけないんだ」

その小声は、誰に向けられたものでもない。自分に言い負かした。

桜の花は決まって春に咲くわけではない、というのがこの学校の常識。時には6月の終わり、梅雨時に咲き、雨のテンポに花弁の舞が調和して清らかなソロを奏で、人間の憂鬱な心を魅了する。また時には冬に咲き、雪と花弁の奏でるデュエットは見る者に癒しを与える。しかし人間の傲慢な心は溶かすことはできない。それが、人間の理屈。この怪談を含む、この学校の14怪談は学校内だけでなく周辺一帯の町や都市でも有名であり、そこに通う学生は、学校の名前を取って『魔亜羅の信者』と呼ばれている。実際にはそんな宗教など存在せず、魔亜羅高校の評判は下がるばかりである。しかし稀に、14怪談教書第1章第3節に「かの地に咲く桜は魅了する者の心を喰らい支配されたり。」とつづられている通り、何故か桜の花が咲いている内は学校内での恋愛関係の告白率が3.2%増加するらしい。また第3章2節には「かの地に来る忌まわしき者には災いと憎悪が根を張り心が妖へと出る」とある。ここにある『忌まわしき者』とは『日本人では無い者』という意味である。もしも、この教書の存在を知る者がいれば、『忌まわしき者』はかの地に訪れることは無かった。

.....*.....*.....*.....*.....*.....*.....*.....*

時は4月の終わりの日。編入としては1ヶ月ほど遅かったと思われるかもしれないがしょうがない。3人家族で、父親の単身赴任中に母親が急に病死してしまったのだから。そのため、いろいろな手続き等があり、入学が1ヶ月ほど遅れてしまった。学校側の配慮で入学後の欠席は欠席日数に組まないという案があったのだが、父親の希望により入学自体を遅延した。自分の子供のことを思ったのだ

ろうかは分からない。だが、子供にとっては苦痛以外の何物でもなかった。本来入学後の欠席であるとすれば、クライスマイトたちに自分の存在が伝わっているはずである。その状態で顔を出せば、氣遣い、手厚く迎い入れるはずである。しかし入学遅延、即ち編入であれば別だ。クライスマイト達は自分のことを知らないのである。その状態で教室に入れば、好奇な視線を全身に万遍なく晒されることになるだろう。

「はあ……」

ため息交じりに息を吐く、と生気が一緒に失われそうになり足が止まりかねない。

「……いやいや！ ダメだこんなんじゃ！」

頬を叩き、気合を入れる。編入初日にこんな憂鬱な気分になってどうする！

学校の門をくぐり、職員室へ直行。その間約2分。意外に大きい校舎なので迷いかねない。昇降口で棟内地図を確認し、職員室へ向かう。さっきまでは憂鬱っぱい感じだったが、校舎内に入ってしまったと意外と落ち着く。なんだろうこの感覚は。

ドアを2回ノックし開く。と、ちょうど職員会議中だったのか教員たちが皆立ち上がっていた。室内は教室2つ分ぐらいの大きさ。

「……お？ あ、君は……なぎし 尻岸君？」

一番前の、教頭？ ネームプレートにそう書いてある机の後ろに立っていた教員が俺に気付いて名指しすると、全ての教員が俺に振り向く。ヤバイ、物凄い恥ずかしい。

「あ、はい。尻岸 はやし 隼はやしです。」

ぎこちなく挨拶して、そのまま硬直。緊張しまくっている。

教頭らしき人は俺に歩み寄ってきたから話す。

「校長から話は聞いてるよ、ご愁傷様。えっと尻岸君の担任は……」
他の教員たちに向き直り、顔を右往左往する教頭。その頭でそんなことするとツラがとれるんじゃ……

「あ、私です」

女性の中で一番背の高い、教頭の席の向かいの席にいた教員が肘を折って手を上げる。てか目の前のじゃねえか、覚えとけよ。

「ああ、そうそう、あの先生。逸水^{いつみ}先生ね」

逸水先生とやらも駆け寄ってきて、

「逸水です、よろしく。あなたのお父さんもこの生徒であり先生だったのよ、1年間だけだったけど。私にとって憧れの先生だったなあ」とあいさつされた。

え、あんなウザいのが？ しかもこのOB？ じゃなんで俺をここに来させたくなかったんだ？

「え、えつと、それじゃ職員会議を終わります、お疲れ様でした」
教頭はそういうと、速足で職員室を出て行ってしまった。職員室がざわめき始める。

「父つてどんな先生でした？」

思わず逸水先生に聞いてしまう。

「どんな……どんな？ えつと……威圧感っていうか……そう！
しつかりしたとこ！」

しつかりしない先生がいるのかよ！ あ、アンタか。なんか抜ける感じがするよな、確かに。

「実はね、私風岸先生に告白したことがあるの」

「ええ！？ いやいや、そんな時もう俺生まれてましたからね！？」
多分。

「10年前だから……うん、そうね」

「いや『そうね』じゃなくて！ 結婚してるって知らなかったんですか！？」

「知らないわよそんなの。見た目が若くて、大学卒業後すぐに来たのかと思っちゃったから」

「それでも最低6歳離れてますよね……」
頭痛がしてきた……

「愛に年齢なんて関係ないのよ！」

「そうですか」

頭痛が酷くなっていく……　もしかして親父、この先生がいるからここに行くなって言っただんじゃ……

「実は30歳超えてて妻子持ちなんて、その時は知らなかったもの……」

「結局10歳以上離れてますよね」

しばらく先生と漫才(?)をやっていると、予鈴が鳴る。

「じゃあ教室に案内するわ。緊張しないでね」

片目でバツチリウインクすると、ハートが跳ねかけた。2重の意味で。

職員室を出て左折。事務棟から教室棟へ。流石に予鈴が鳴ったらには廊下には誰もいないだろうと思っていたが、結構いる。逸水先生が「ほら教室へ入りなさい」と言うと男子は素直に入り、女子は先生を睨み付けて入っていく。女子には評判が悪いみたいだな、そらそうか。顔と性格の所為だろう。2階へと上がって廊下を進み、1年A組の前で止まる。

「私は行くから、ちょっと待っててね。呼んだら入ってきて」

またもやウインク。俺には年上属性はないですよ、はははは。ふう。

廊下にも教室内の声が聞こえる。「おはようございます」先生の声だな。「実は、転校生がいます！」早いな！もうちょっと延ばそうよ！先生が叫んだ直後、ざわつきが最高潮に達した。

「え、男？　女？」「さつき少し見たけど、男だったよ」「マジか！」「女がよかった」「うん」「分かる」「どういう意味よ」「何が言いたいのよ」お願いだから静まって。

先生が「はいはい！」と言いながら手を叩くと、男子の声がピタリと止んだ。その行動にさらに女子が先生を睨みつけているのが容易に想像できる。……恐るべき、女子。

「さて、入ってきてもらいましょう、どうぞ」

入ってもよろしいでしょうか。女子の顔を見たくないのですが。ガラガラと扉を開き、歩みだす。教卓の前まで来たところで向き

直り、「風岸隼です」と挨拶。先生が「仲良くしてあげてくださいね」とかい出す。小学校じゃねえんだから。

「風岸君の席は、中央列最後尾ね」

「了解です」見りゃわかる。そこしか空いてないんだから。

こうして俺の物語は開かれたのであった。……ふう。

episode 03

「風岸ってどこに住んでんの？」……松戸の南東部あたりかな」「どこ出身？」……生まれたのは日本じゃない」「え、外国？どこ？」「……イギリス・ウエールズ地方」「ウエールズってどこだっけ？」「……えっと、グレートブリテンの南西部」「え、てことはハーフ？」「……うん」「英語上手い？」「……上手い？っていうか、普通が分からない」「てことは上手いのか」「……いやだから」「髪なんで金髪？染めてんの？」「……母親譲り」「目つき悪いのは？」「……目が悪いのと父親譲り」最後待つて。お願いだから。

朝のホームルームが終わって1時間目が始まるまでの間、20近くの質問に答えた。正直疲れた。まさかここまで人気者になろうとは。

そもそもこの学校は基本として帰国子女制度はなかったらしく、俺は特別待遇らしい。ここの卒業生かつ教師経験を持つ父親のおかげなのだろうか。その割には父親の話は出なかった。

授業内容は以前の英国むいこくの学校とは言語の差はあるものの、学力の差はほとんど無かった。それほどこの学校が優秀なところであると
言えよう。丁度1時間目は担任逸水先生の英語。先程の会話を再現
すると、

*	.
.	.
.	.
.	*
	.
	.
	*
	.
	.
	*
	.
	.
	*
	.
	.
	.
	*
	.
	.
	*
	.
	.
	.

「……では次の英文を、次の人」

先生は天然度は既に常軌を逸している。次は俺・異国同士の親を

持つ、ハーフの俺。

わざわざ意見を言うのも面倒なので、椅子から立ち上がり、

「When you have eliminated the impossible, whatever remains, however improbable, must be the truth.」 he said.」

と、熟した。しかしこの行動が誤っていたらしく、

「あつ、尻岸君だったのね、えつと……」

と、混乱して慌てふためく彼女がまた、可愛かったりもする。

.....*.....*.....*.....*.....*.....*.....*.....*

こんな感じだ。

2時限以降も数学、体育、化学と続いた。何故か俺が悉く指され、熟しはしていたのだが、不運が起きたのは、昼休みを開けた5時間目。古文だ。

「では尻岸君、次をお願いします。『来る』の未然形です」

と言った古文担当の学年主任・古里先生は虐めなのか天然なのかは知らないが、俺を指名した。当然外国育ちで、英国でも、英語の古文であるラテン語などは勉強しない。無論、日本語の古文なんぞわかる訳がない。

「えつと……」

必死に考えるが、分からない。なんだよ未然形って、知るか。教科書をバサバサと捲って情報を探るが、答えらしきものは出てこない。

「……分かりません」

そう答えるしかなかった。

「この学校の歴史？　なんでそんなもんが知りたいんだ？」

1回だけ顔を見たことのある校長に尋ねてみた。

「えっと、ですね……こ、ここの学校に入学するにあたって、ちょっと知りたいなって……」

「学生手帳を見ればいいじゃないか」

「ですよ。そう来ますよね。」

「……あー……そうですね。では、これって知ってます？」

右にポケットに閉まってあった写真を取り出し、見せる。

「こ……これは………！」

校長の顔が青白くなっていく。

「この人の学ランの左カラーについているのは、ここの学校の校章エンブレムですね？」

校長は頷く。

「う、うむ。しかし、これを一体どこで……？」

「17年前、ここに帰国子女として迎えた人の葬儀の際に借りてきたものです」

「た、頼む。このことは誰にも………！」

「分かっていきます。俺は調べに来ただけです。昨日、直前にこの事件イースは関わるなと言われました」

焦り、震えた声をいったん落ち着かせる。落ち着け俺。

「しかし、俺は知らなければなりません。母の病死の原因を。そして俺がここで生きていけるかを」

「そ、それは………」

校長の目には、既に光はなかった。

「お願いします。教えてください」

一呼吸置き、

「この写真の彼はなぜ、上半身が『狼』なのでしょう？」

「ぐ……」

校長の顔は既にグシャグシャになっていた。

「申し遅れました。私、こういうものです」

俺は左内ポケットからある証明証を取り出す。そこにはこう書かれている。

「CIA Calmy Hayato Riverbank」

episode 04

校長室を出、父親にメールで経過報告を済ませる。校長は大丈夫だろう。明日自殺体で発見されるんじゃないだろうな？

「風岸君！」

昇降口を出たところでさっき教室でカラオケに行かないかと俺を誘った女子5人が俺を取り囲んだ。

「用事は終わった？」

「は？ あ、ああ……」

不意を突かれ、つい構えてしまった。危ない。

「ほら、だから言ったじゃん！ どうせ直ぐ来るって」

「え？ な、何？」

もしかしてさっきの会話を聞かれてたんじゃないだろうな？ い

やでも一般人からしてみれば……

「校長室に入っていくところ見たの。何の話をしてるかまではわからなかったんだけど、何となくは分かったよ」

「え……？」

まさか、まさかまさか……！？

「この学校の14怪談！」

「……は？」

意味不明な上理解不能なことを言われ呆氣にとられる。14怪談

……？ なんだそれ。

「ホントは14つじゃなくてもっと多いんだけどね」

なんだそれ、なんで14なんだよ。

「第3章2節、『かの地に来る忌まわしき者には災いと憎悪が根を張り心が妖へと出る』！ どういう意味が分かる……？」

全くもってわからない。というか、それってなんだ？ 教典か何か？

「何それ？」

「『外国人がこの高校に来たら、人間じゃなくなる』！　って言う伝説なの」

「え、マジ？俺大丈夫？」

冗談交じりで返しているつもり。しかし……これはいきなりあたりか……？

「なんでもね、この高校自体が訳有みたいで、墓地だったところに建てたんだって」

墓地、か。成程……

「ってそんな話はどうでもいいの！ カラオケ行くよ～～～！！」

待て押すな走るな腕引つ張るな！ 都会の女子怖い！ 俺潜入で来ただけなのにここまでされなきゃいけないのでしょうか、もう虚しさが残んねえよ！

結局その日は女子軍団に絡まれ、ろくに調査もできなかった。…

俺、エージェント諜報員なんですけど。

*	.
.	.
.	.
.	*
*	.
.	.
.	.
.	*
.	.
	.
	.
	*
	.
	.
	*
	.
	.
	.
	*
	.
	.
	.
	*
	.
	.
	.

翌日、昨晚女子に連れられて一晩中野外を延々と歩き回ったのを早速後悔し、今日以降も誘われても絶対断ると心に誓った。もうあんな悲劇は繰り返したくない！ 事件は現場で起きてるんだ！ これ以上上の意見なんて聞いていられるか！ ……何言ってるんだ俺は、大丈夫か。

目の下に、もう完つ全にくつきりについている隈は諦めて、家に帰ってきてから3時間後に登校するという最悪な事態となってしまった。自宅から15分の距離に高校への通勤手段は歩き。自転車だと5分で着くのだが、まだ事務手続き書を提出していないのでそうはいかない。バレたら問題児扱いされてしまう。今日申請しよう。

高校は町の高台にあつて、そこへの道は全て上り坂。自転車だと結構つらいかもしれないが、気にしない方が身のためだろう。

「……つつつても、……なあ、……ちよつと、……ヤバイ」

昨日から続いているこの疲労感は半端なく、幼少のころから施設にて鍛えられている俺でさえも、筋肉や内臓が悲鳴を上げる。……

「つか、腹痛え。腹筋なのか内臓なのかわからない。誰か助けて。はーやと君っ！」

真後ろから聞きなれない、甘く甲高い声が耳を通って頭にこだまする。

振り向くと、笑顔全開というか、その笑顔が周りの男子に伝染するほどの脅威となりそうな笑顔が、俺の顔の目の前にあった。しかもその状態が数秒続いた挙句、膝が変に折れ曲がる。

「うわ、わ！」

振り向いた状態で進行方向に倒れたので、派手に転び右ひじを強打した。ゴツ！ という鈍い音が聞こえ、肘から肩へと痛みが伝わる。

「だ、大丈夫！？ 」

驚いた声がさらに頭を震撼させる。三半規管がイカれ、ともに立てそうもないが必死に踏ん張る。

「だ、大丈夫……つとお、おぁ！？ 」

立ち上がるうとして一歩前に出して踏みしめた右足がさらに滑る。その結果顔面までもコンクリの道路に強打。なんなんだ……

「……………お、おぉ」

非常に情けない声が漏れる。ヤバイ、マジで死にたい……

「え、えーとお。ホントに、大丈夫」

「大丈夫……」

額を道路に付けた状態で答える。最早、人として情けなく思つた末だった。

・ ・ ・ ・ ・
* ・ ・ ・ ・ *

「クラスメイト？」

数分後。何とか自力で回復し立って歩けるようになった。ここだけ抜粋すると、下半身不随の重患者の奇跡の生還とも取れそうなのがさらに俺を追い込む。

「うん。隼君の前の席だよ」

昨日の女子軍団よりかはマシな女子に初めて話した奇跡の体験。これは好印象になりそうだ。……あくまでも潜入捜査としての必須スキルだ。

「記憶にないな」

事実、女子には興味がない。なぜなら、施設にいた頃寮母や施設の仲間に囲まれて育った時、女子にそんな感情など芽生えなかったからだ。そもそも寮母や女子を含めた仲間たちとは同室や同環境で育っていたし、風呂なども共通だった。生まれてから男女共通の環境で育った俺たちに性的な恥じらいや秘密は存在しない。存在し得ない。

「……え——」

落ち込んでるといふより、墜ち込んでいる。つまり、撃沈されている。アニメでよくある、『ずーん』という平仮名が実際に頭の上に載っているようだ。

突然彼女はジャンプし、俺に向き直る。その異様さに俺も立ち止まってしまった。

「私っ！ みずかみ 瑞守 あやな 彩菜！」

自己紹介されているのか、単に叫ばれているのかもわからない大声。

「誕生日は11月11日の蠍座！」

「いやそこまで求めてない」

一応突っ込みつつ、歩を進める。俺の脚に追いつくように早歩きで駆け出す瑞守さん。

「聞いてよ！」

「求めてないって」

「聞いてって！」

「なんで」

「いいから！」

煩い黙ってくれ。と、心でつぶやきつつ、「……で？」と聞き返してしまう。

「3サイズは上から83・58・80！」

胃酸が逆流しかけた、というのは嘘でもリアクションを取らなければ不審に思われてしまう。演技とは言えど、蒸せる。

「ぐあふ!?」ダメだ、わざと蒸せると変な声になる。

「因みにC——」

「言わなくていいから！」

昨日の女子団体と同じくらいの疲労を感じさせる瑞守さん。いったい何者……

episode 05

それからというもの、腕時計を確認したところまだまだ時間があるというのにずっと喋っていたせいか、高校に着くころには予鈴10分前となっていた。その間、登校中は一方的で意味不明な自己紹介に的確な突っ込みを入れていた。それだけで疲労はピークを越え、悪化する一方。そして最終的には

「そだ、メアド交換しよう！」

と一般男子からしてみれば絶対的なシチュなものに対し、そんなもんどうだって良いし、とにかく眠いし、いろいろと放り出したいと考えていた俺からしてみれば最悪のシチュだった。一々携帯を操作して、赤外線のリモコンを合わせる。普段それぐらいの動作は簡単なものだが、この不眠時間24時間超えの今では結構難しい。

.....
.....

結果から言つて、この日の午前中は何もせずに終わった。教室に着き次第机で俯せになると、1分をせず内に夢の世界へと旅立ち、起きた時には腕時計の短針が13時を指していた。昼休みだ。丸々4時間半寝てしまい、絶望に暮れた。はあ……

「こら尻岸！」

起きて直ぐ、行き成りの罵声と同時に右頬が引つ張られる。

「あふあふあふあふあ！」

声ならぬ声が出て、恥ずかしくて堪らなくなる。

「何4時間目一杯寝てんだ！ 転校生としてのプライドはないのか！？」

「……そんなもの昨日1日で粉末状になるまで文字通り粉々に砕かれました……」

横目で、昨夜俺を散々連れまわした女子団体を見る。……目があって直ぐに逸らされた。おいコラふざけんな。

しかしそんな悪あがきは通用せず、今度は頭の天辺に拳が突き刺さる。

「学年主任に向かって良くそんな口が利けるな。ああ？ いいか、次俺の授業で寝てみる？ そのベランダから突き落とすぞ！」

ちよつと待て、体罰宣言を通り越して殺人予告を突き付けてきやがったぞこのバカ。日本じゃ体罰すら違法行為じゃなかったか？

「そして、ついでにコイツだ」

俺の目の前に厚さ5cmはあるだろう、書類をドサツと積み上げる。……え？

「課題。明日までだ。明日の俺の授業までにやって、提出しろ。わかったな？」

……え。

「……一応聞きますが、これ何枚？」

「300枚」

即答された。しかも内容を見てみると、化学の穴埋め形式の文章題が1枚1枚万遍なく印刷されている。

「全部だぞ？ 当たり前だからな」

そういうと、学年主任兼1年化学担当の色沼先生は教室の窓際後ろのドアから出て行って、バンツと音を放って閉めた。

後に取り残された俺は、クラスメイトの哀れみと同情の視線の嵐の中に一人で佇んでいた。……椅子に座ってるけど。

……………
……………
……………

「ホントにバカだね」

下校時、登校路が同じということは下校路も同じだということを再確認した俺と瑞守さんが校門出て直ぐの坂道を下りていた。

「なんなんだあのものぐさ野郎……」

怒号と苦悩に頭が逆上せ、今にも倒れてしまいそうになる。危ねえ。

「ふざけんな。死ね。土に還れ。消えろ」

その他思いつく限りの悪口を並べてみたが、この気持ちに変化はない。妥当といえは妥当だ。

「そんなこと言ってたって、課題の枚数が減る訳じゃないでしょく？」

瑞守さんがもつともなことを言う。

「ンなこと言ってたって、ありえないだろ…… 瑞守さんはこういうことあった？」

「や、ないよ。でも色沼先生言ってたよ、『一度でも遅刻、欠席したら単位没収。携帯操作や昼寝などは減点¹。私語と課題未提出は減点²。文句のある奴は来い。一対一^{タイムン}張ってやる』って」

「つまり課題やってこないと、減点合計³になる訳か……」

やりやいいんだけどね、やりやあ。……え、ちよつとまで、減点

？ なんて俺突き落とされかけたんだ？

「どうするの？」

瑞守さんが尋ねてくる。

「どうするって？」

「だから、物理的に無理でしょ、明日までになんて歩くと同時に茶髪のポニーテールの先端が跳ねる。

「何が痛い訳？」

「あーもー、わかんないかなあ」

いやわかるけどね。言わせただけだ。

「私も手伝ってあげるって言ってるの」

朝見た笑顔より若干卑屈そうな笑みが広がる。

「もちろん私だけじゃないよ」

「……は？」

その瞬間、真後ろから物凄い速さで俺たちを追いかけてくる奴らが姿を現す。

「う俺たちもいるぜえ——！！」「私たちも——！！」

恐らくクラスメイトであろう（覚えていない）男女計8人が、叫ぶと同時に俺を蹴り飛ばす。ぐは。

「10人いれば、300枚なんて1人30枚でしょ？　すぐ終わっちゃうよ」

道路でぶっ倒れている俺を引き揚げ、肩を組ませてくる男子。それを見て笑い合っている女子。

そのとき、俺は初めて悟った。

——こいつら、まさか……

それでも、考えないことにした。もしそうだとしたら、俺はここにいられない気がしたから。知ってしまったらもう戻れない。帰ってこれない。諜報員^{エージェント}としては失格かもしれないけど、俺はこの道を選ぶ。それが、『俺が俺である理由』だから。
ノイ・ミール・ノイ・リズン

episode 05・5

――私の声が聞こえますか？
――私はここにいますよ。
――だから皆私に声をかけて。
――お願い。
――このまま消えていくのは嫌だ。
――自由になりたい。
――でもなれない。
――なにかが、私を縛ってる。
――それは夢。
――それは願い。
――それは記憶。
――それは人。
――そんな幻像が破れたら、
――きっと自由になれるかな。
――その可能性に掛けて願う。
――いつか、自由になれますように。
――いつか、解き放たれますように。
――『解』は私を束縛し、
――『謎』は私を暴き出す。
――そして、私が来るのは
――ノー・ミィー・ノー・リーズン
――『私が私である理由』。

episode 06

いくら10人といえど、300枚の文章題問題を割り振ったところで、1人につき30枚解くことになる。その内1枚にかかる時間は約10分。単純計算で5時間かかる。もしこの300枚を1人でやろうとしていたら、50時間かかることになる。今日の午後1時に渡されたこれを、明日の午前9時40分までに終わらせることは物理的に考えて不可能であった。つか、あの教師は本当にこれをやってこさせるつもりだったのか……、理解に苦しむ。

あれから時間が経過して、午後10時。5時に俺の家に着き次第、皆が集中してやってくれたおかげで終わらせることが出来た。そしてその内4人は疲れ果てて寝てしまっている。

「……はあ」

溜息が零れる。俺も横になりたいところだが、生憎スペースがない。一軒家で、しかもそこその大きさの家だが、俺の部屋は10畳程。机やタンスなどの家具もあるため、10人全員が寝転べるほど広くはない。

「あ、隼君」

疲れ切って、体育座りになって硬直している体を動かす。ヤバい、首が攣りそう。

「……うん？」

声すらまともに出せない。

「そろそろ、私たち帰らなきゃ」

そう言う瑞守さんにつられて「あ、俺も……」「私もそろそろ……」

……「やべえ、俺門限8時だった」「私の家は門限ないから……」「等と言いながら立ち上がる。俺も立ち上がり、

「……今日は悪かったな、こんなに遅くまで付き合わせちゃって」と詫びを言う。

「良いって良いって」

「困ったときはお互い様だよ」

「今度英語教えてな」

「それじゃ私も」

まだまだ元気、と言ってるかのようにふるまっているが、顔を見れば疲労がピークを越えているのがわかる。

部屋を出、廊下を大勢で歩く。時々ミシと音が鳴るが気にしない。そこまで古くはないはずだ。

瑞守さんを先頭に、一列になって玄関から出ていく。

「それじゃ、また明日な隼！」

「隼君はいば〜い」

常にテンションの高いクラスメイトが1人、また1人と帰る。やがて、1人玄関で佇んでいた俺は、己の無力さを痛感しその憤りを拳に乗せて壁を殴った。

.....
.....

「よくやった、ほめてやろう」

翌日の3時間目、授業の前に昨日出されたプリントを突き出した。しかし帰ってきた言葉はそれっぽっちで、それだけかよと心の中で突っ込みつつ、色沼先生の評価が思った以上に悪くなかったので安心した。

「で、誰が手伝ったんだ？」

……やっぱりな。どうせそうだろうと思った。そうでなきゃ、今ここでプリントが出せるわけがない。

「男子が鮎川さん、石田さん、津島さん、木下さんで、女子が瑞守さん、井上さん、宍戸さん、出山さん、草御さんです」

言葉をつづると同時に、各教員に配布される出席簿に記入してい

「……OK。よし、それじゃあ授業だ。席に着くように」

自分の席について、教科書とノートを開く。

しかし、今思い返すと、昨日の課題は俺のものではないの

真偽を解くのは、面倒だが。

[illegible]

放課後。帰ろうと教室を出た直後、その違和感が俺を襲った。

「まいっ たな……」

「仕方ないな……」

胸の裏ポケットから携帯電話を取り出す。電話帳から父親の電話番号を検索し、コールする。3コールの末、繋がった。

「私だ」

父親は俺の上司でもある。現場の対応が不可能な時は、上司に従う義務があるからな。このどすの利いた声は、何時聞いても聞ききれない。

「あ、俺」

「どうした。転校したくなっただか。待ってる直ぐ手配する」

「違う！ 仕事の話だよ！」

「それならそうと先に言え」

「言う前に早合点したのはどこの誰だ！？」

「耳元で五月蠅く鳴くな。耳鳴りがする」

「じゃあ何で電話に出た！？ ってそういうことはどうでもいいんだよ！」

コントに付き合っけいられる状況じゃない。

「……今さ、学校に霊がいるんだよ……」

「排除しろ、と言いたところだが2、3点確認したい」

「な、なんだ？」

「第一に、それは人間の霊か？」

「あ、ああ。見た目はそうっぽい」

「脚はあるか？」

「見たところは無い。足がある霊もいるのか？」

「いや、その場合は人間に化けた妖怪の可能性が高い。脚の存在が曖昧であるなら、人間の霊であることにまず間違いない」

「そうか」

「第二に、日本は今、日暮れか？」

「いや、そうまではいかないけど十分に日は傾いてる」

「そうか。第三に、その霊は日陰にいるか？」

「ああ。丁度、一日中日陰になる場所だな」

「質問は以上だ。総合的に考えて、その霊はお前に倒せるレベルと

確認した。健闘を祈る」

切られた。あっさりとしてやがる。

「……ホントかよ」

そのまま帰る訳にもいかず、やはり中庭に直行。花全開の桜の木。今は五月の初めなのに……そしてその傍にいる一人の少女。下を向いたまま動こうとはせず、棒立ち（脚は無いが）している。

「えっと……」

話しかけようとして、詰まる。周りに一般人がいる。もしこんなところで話しかければ、一般人からは完全に不審者扱いさせるだろう。なんで桜の木に話しかけてんだ？、と。そして一方この彼女からしてみれば、自分を見えないはずの一般人が話しかけてくるなんて思ってもいないだろう。ドン詰まりだ。

「……………」

しかたないので、散っている桜の花を掴む素振りで彼女の手首を掴み、一目散に人目が無い日陰へと突っ走る。これだけでも不審者な気がするが……しょうがない。

驚いた様子の彼女は、目を極限まで開いたように俺を見つめてくる。止めてくれ。めっちゃ怖い。

「……お……い………う………」

彼女が何か言っているが、聞こえない。てか聞きたくない。怖いから。

第二校舎裏の日陰。左にはプール、右には体育倉庫となっていて、こんなところに来る生徒はまずいない。

「で、なんでこんなところにいるんだ？」

ホントは話し合いなんてしたくないのだが、しょうがなく語りかける。

「あなたは……私が、見えるの？」

暗く、もう顔を見たくない。外見は普通の人間だが、オーラが常人離れしている。

「あ、ああ、見える。お前がなんでここにいるのかは知らないが、

放課後になつてすぐ、隼君は教室から飛び出して行つてしまった。監視対象に逃げられてしまうのは、監察官としてあるまじき失態……どうしようもない。

「ふう……」

いつもの監察時間帯は午後十時までだけど、今日ぐらい……いや、そういう心構えが任務を失敗へと動かすことがある。気を緩めてはいけない。

教室を出、隼君の後を追いかける。階段を駆け下りて、昇降口を裏から周り中庭に出る。事務棟裏の一本だけ花を咲かせた桜の木に彼はいた。……なんか、どう考えても不可解な行為である。いや、彼が。いきなり腕を振りかぶり、何かを掴む。桜の花？　そして直ぐに人気のないところへと走つて行つてしまった。……何してんの？　不審こそあつたが、彼を監視している私もそれなりに不審なので善処する。

「……なにやってんだろ、私」

この任務前……まだ本部にいたころ、私は入……隊？　二ヶ月目の新米だった。なのに、普段の行いがよかったのか、部長に任務を任されてしまった。上司の任務に勝手に付いて行つて、それなりの能力と覚悟をもつてこの任務に就いたつもりだったけど、まだ無謀だったのかなあ……、って！　そんなマイナーな気分はどうすんの私！　こんなじゃダメ！　左右の頬を引っ叩いて気合を入れ直す。……痛い、すごい痛い……

『Pi Pi Pi Pi Pi Pi Pi Pi』

電話のコールが私を現実へと連れ戻した。

「はい、こちら雛神」

あえて、今の名前を言わない。

「おい……、折角証人保護プログラムを受けているんだから、今の名前で受けたらどうかね……」

「申し訳ありません部長。しかし、この苗字は私自身を縛りつける

ための戒めとして、心に鍵をかけていますので」

「心に鍵を掛けたら、コミュニケーション能力に欠点が生まれる気もするが？」

「その点では問題ありません。クラスメイトや担任にもバレていません。今のところ、このことは校長しか知り得ませんので」

「そうだったな……いや、うん。君が問題ないと言うならそれでも良い。でももし不安や要望があれば何でも言ってくれ。君の過去は誰のものでもない。君だけのものだ。この任務やここだって、私が強制したわけでもないし、君が希望したことだ。君が望んだ通りに全て受け入れる」

「……ありがとうございます」

「うむ。では、幸運を祈る」

「はい。お疲れ様です」

電話を切る。

このまま、誰にも悟られずに生きていけるのが一番良い。私は、それを一番望む。ふう、と再度溜息。溜息は幸せの逃すとかいうけど、迷信……っていうか、嘘だよね。そう思いたい。

ふと、監視対象に視線を戻すと、彼は蹲っていた。その瞬間、私は走り出してしまった。なぜなら。

今まで見えていなかったものが見えてしまったから。

白く輝く一陣の閃光。その美学は誰をも魅了し、魅入らせることが出来る。しかしそれは作品の中だけだ。現実には起きれば、それは凶器と化し、血を流らせる。

「く……」

油断したのがまずかった。父親が『倒せ』といった意味がやっと分かった。一筋縄ではいかない。当たり前だ。いくら人間の形をしていても、既にこの世には関われぬ環境だ。誰とも、何とも。

左肩…… かるうじで動かせる。神経は切られていないようだ。しかし皮膚は裂け、深紅の液体が流れてくる。

「終わりだ」

その声とともに、再び閃光が響いた。今度は頭の真上から、垂直に狙っている。まずい、この体制で受けたら確実に刺さる。でもこの状態じゃ避けることもできない。裂かれた物理的な痛みと砕かれた精神的な痛みが俺を蝕む。今ここで、俺は負ける。

しかし「ギイイン」という金属音が聞こえ、俺の前に誰かが立つ。…… 誰だ？ おれを、助ける？ この霊が見えるのか？

「逃げる！ 早く！」

聞き覚えのある声が俺の緊縛を解く。

「……？ だれだ貴様。私が見えるのか？」

霊までもが驚嘆を奏でる。

「そんなことなんだっていいでしょ。それより、ここで成仏しなさい」

霊の閃光とは違う、風を切る音を耳が捉える。

「貴、貴様……」

霊の深く思い声が驚きを物語る。

「ほら、何してるの？ 掛かってきなさいよ！」

ようやく動けるほどになってきた足を無理矢理動かし、戦闘に飛

び入りする。

「ちよつと！？ 怪我してるんだから逃げるか休んどきなさいよ！」
「うるせえ！ 俺の問題だ！ 俺が片づける！」

肘打ちで霊の脇腹を打つ。それと同時に助けてくれた女が霊の鳩尾に踵で一撃をかます。

「ぐおう……！？」

呻く霊が地面に倒れて地鳴りが襲う。

「貴様らぁ……！！！」

その雄叫びと共に姿が変化^{へんげ}する。元の姿の数倍にも膨れ上がり、制服を着ていたはずの霊の体は凹凸と毛が目立つ獣へと化け、妖怪と言えるべき醜態を漂わせる。両脇からは第三、四の腕が生え、顔は既に異様である。

「……貴様ら、生きて帰れると思うな！」

最早さつきまで女子高生だったはずの相手に何があつたと思いかねない心境だ。その声は低く、高い。様々な声調の音が同時に再生されたような、恐竜を思わせる声。既に化け物だ。体長は優に6mを超えるだろう。

「畜生……」

「隼！ 受け取れ！」

女の声に反応し、その方角を見る。すると刃渡り30cmはあるナイフが飛んできた。そしてそれを受け取る。

「サンキュ！」

順手で受け取ったナイフを逆手に持ち帰る。やはりこの方がしつくりくる。そして同時に、走る。

「俺に勝てると思うのか！」

化け物の右前腕が俺に向かって伸びる。それを合気道の要領で躲し、手首にナイフを刺す。

「ぐうお！？」

してさらに肘の方へと腕を裂いていく。

「らぁぁ……！！！」

肘の骨（あるのかどうかは知らんが）まで到達するとナイフを引き抜き、化け物の足の甲、膝、右後肩を踏み台にして背中に戻る。

「ちょこまかと！」

化け物が胴を振るのに合わせて、俺までも揺らされる。しかし……「そつちばつか構ってんじゃないよ！」

女が構えていたナイフを化け物の左目に目掛けて放つ。しかし外れ、頬を掠った。

「ちゃんと狙えよ……！」

「くおっ……！」

掠ったただけだが化け物は微かに怯み、上半身を支えるのに苦し^くているようだ。

「煩いわね！ 当てればいいんでしょう！？」

女は制服の背から新たなナイフを出し、両手に構える。

「はっ！」

叫びと同時にナイフが放たれる。今度は二連。確実性が向上された。

「貴様らごときにこの俺が……！」

咆哮と同時にナイフが両眼に刺さる。……見た目は物凄いシール。両眼が潰れた醜い化け物が踊っている。その踊りにつれて、背中^中で張り付いている俺はもがく。

「ほらっ……！ 落ち着け……！」

「黙れっっ……！！！」

足を首に絡ませ、頭に乗っかる。これだけでも本来なら頸椎骨折で一撃必殺だ。化け物でなければ。

「離れろっ！」

首を振り、必死に俺を引き剥がそうとする。しかし俺は腕でしっかりとしがみ付き、何とか引き剥がされないようにする。俺もナイフを構えているのだが、このせいで何もできない。

「誰が離れるかっっ！」

その中で、女は制服の両袖から新たなナイフを引き出し、構える。

いつたい何本持つてるんだ。

「私だって、負けられない！」

対抗意識を持つよりもこいつをどうにかしろよ！　なんで俺だけが必死に肉弾戦に参加してんだよ！　てめえさっきからナイフ投げてばつかじゃねえか！　と色々と言いたいことがあるが叫ばない。仲間割れは御免だ。それが原因で敗北なんて、愚劣極まりない。

一瞬動きが止まった化け物に、逆手に構えたナイフを頭へと振り下ろす。

「な……！？」

悲鳴ともとれる化け物の声は完全に無視する。ひたすらナイフを振り下ろす。それだけに集中する。

「これで……っ！　最期……っ！」

女が化け物へと走り、足の甲を踏み台にジャンプする。そしてその一瞬で喉の左右に突き刺したナイフを交差させた。

巨体が地面にひれ伏し、地鳴りを奏でる。

憎しみと憐みの連鎖が断ち切られた。

翌日にはニュースや新聞で大騒ぎになった。

校舎の損壊や倒木、地割れと、何をどう考えても不自然すぎる現象に、ゲストの専門家さえも頭を悩ませていた。

もちろん、俺と女のことは何も言われていない。校長のおかげか、俺が女の組織の人間の根回しかはわからないが。

しかし、やはり俺たちの処分が免除になったわけではない。無論、任務関係ではなく、学校の方だ。二人共に三日間の自宅謹慎。そう、謹慎処分になった。なのに、俺は今自宅近くの本屋にいる。だって、家に居たって暇だし、することもない。課題も出されずに、追放されたような感じだ。

「……ふう」

10分ほど前から手に取っていたライトノベルを本棚に戻し、他のを探してみる。どうしようか、他の本屋で探してみるか……

「いらっしやいませー」

可愛らしい女性店員の声が店にこだまする。まあ興味ないけどな。顔は良いけど。

「……あれえ？ 隼君？」

今来た客はどうやら俺の知り合いのようだ。俺を見つけるなり、名前を当てて近寄ってくる。

顔を見ると、どうやら昨日の戦友で、クラスメイトだ。

「……そうか、お前も謹慎処分だったな」

自分で解るほど冷たい声で囁いた。

「何やってんの？ 自宅謹慎でしょ？ こんなところに居たら駄目じゃない」

「そのセリフそっくりそのまま返してやろうか」

天然なのか、強情なのか。わからないところだ。

「何よ、その態度。私の上司の機転が無かったら、今頃二人一緒に

退学だったのに」

やっぱりか。

「つか、何の組織に入ってたんだよ」

「分からない？ 人種で。この白に近い銀髪、水色の瞳、白い肌！」

「……………もしかして。」

「ロシア？ スペツナズ？」

「正解！」

正解かよ。

「ってことは何か？ お前も潜入捜査？」

「まあね、つまんないけど」

「つまんない言うな。俺だって任務だ、カンパニー CIAのな」

この際言っちゃうけど。

「え？ CIAなの！？ 感激！」

……………何が？

「私ね！ CIAになりたかったの！」

「なりやいいじゃねえかよ。非アメリカ国籍者でもなれるよ」

「そうなんだけどねー、はあ……………」

女の溜息交じりの息が白く濁る。

「ってお前、何吸ってた？」

「え、何が？」

しらばつくれようとしてるぞ。

「何がじゃねえよ、たばこか何か吸ってただろうが！」

「ああ、うん吸ってるよ。だって日本って満20歳以上からでしょ？ 私21だもん」

衝撃事実発覚。年齢まで偽装して潜入するのかよスペツナズは。

「そうは見えないかな……………」

「えへん、童顔が不可能を可能にしたのね」

それは威張れるところなのか。

「そついや、結構戦い慣れしてたようだが、α部隊か？」

「違つよ、ヘビーフェイス α部隊じゃない。ザスローン E部隊だよ」

こんなところで大ぴらに宣言してもいいのだろうか。どうせ、言
つてることを理解できる人間なんていないだろうけど。

「それより、今日行くところとかある？」

「や、特にないけど」

「それなら、この後付き合ってほしいんだけど」

.....*.....*.....*.....*.....*.....*.....*.....*

「暇だ——」

二時間目、英語は特に退屈。だって、担任の授業だし、逸水先生
むかつくし。この後の昼休みが望ましい。

窓の外の、三年生の授業を覗いてみる。

「.....今頃隼君なにやってるのかな——」

ちよつと気になった。なんか謹慎処分になったって聞いたし、何
かやつちやったのかな？

「.....はあ」

幸せ逃げるぞー、と自分に言い聞かせても、特に何ともならない。

「.....えと、次の英文、瑞守さんお願いします」

「.....はい」

英語なんて意味わからない。何が書いてるのかさっぱりわからな
い。単語の意味が分かってても、訳せない。英文がちゃんと読めても、
日本語にできない。隼君に教えてもらいたいなあ。

「On coming the spring, cherry
blossoms. Various animal's cry i
s ringing」.

何？ 春？ 桜？ 動物？ だから何？

「はい、有難うございました。この場合のcomingはcome

の変形で——」

集中なんて出来やしない。だって気になっちゃうんだもん、隼君のこと。べ、別に特別扱いする気はないけど——、何か気になっちゃうんだもん！

「彩、どうかしたの？」

右隣の草御 梨子が小声で話しかけてくる。

「なんでもな——い」

「何でもなくないよ？ わかってるわよ、風岸君のことでしょう？」
びくつと反応して硬直する。

「彩ってば、解り易いね。顔まっかつか」

「ち、違うわよ！ そんなんじゃないわよ！」

「そんなに気になるんなら、家に遊びに行ってみたら？」

更に顔に熱が溜まる。もう自分でも顔が赤いことが分かつちゃうくらい！

「何考えてんのよ！ 隼君はそんなんじゃないと思うよ」

「う、う——う——」

もう嫌だ！ 梨子ちゃん怖い！ 誰か助けて！

「何やってんだ？ お前ら」

後ろの席の津島……名前なんだっけ？ 苗字しか出てこない。とりあえず男子。

「梨子がね、風岸君のこと気になっちゃって、夜も眠れないんだって」

「そこまでは言ってない——！」

「なんだそんなことか」

そんなこと！？ 今そんなことって言った！？

「つかさういや、出山も謹慎じゃなかったか？」

「あ、そーだったね。彩、どうする？ 今頃風岸君と新菜一緒にいるかもしれないよ？ デートとか」

「いや——！！！！！」

episode 10 (前書き)

用語解説

・CIA (Central Intelligence Agency)

米国大統領直轄の組織。主に国益のために活動する。

・スペツナズ (подразделения специального назначения)

ロシアの特殊任務部隊。広範囲な組織に所属する。

「ここは……？」

電車で1時間。都内の高層ビルの奥地。それらの一つにそれがあつた。地上から見上げても最上階が分からないほどの高さを誇るマンション。

「私の家」

ここが？　どんだけ派遣に金掛けるんだよスペツナズ。

「上がって」

「まだエントランスだけだな」

それにしても豪華だ。まだエントランスなのに、装飾が派手すぎる。なんでシャンデリアがあるんだよ。半径3mはある。

エレベーターに乗って一気に38階まで駆け上がる。つかちよつと待て、なんで1秒間に3階分上がれるの？　おかしいな？　おかしいよな？

「ああ。なんでか知らないけど、私がここに来る直前に改装したらしいわ。何があつたのかしらね」

恐らくお前のせいだろうな。

そして10数秒後、38階に到着。

「まさか38階丸ごとお前の所有物ってわけじゃないだろうな」そんな気がしてならない。

「そんなわけないでしょ、2部屋分よ」

それでも十分すごいな。1階分に15部屋あっても、それはそれで疑問を感じ得ないが。

エレベーターから出て、廊下を右折。さらに数10秒後、1つの部屋に到着。

「こっちの3802号室が客室。3801が自室用ね」

「はあ」もうどうだっていいよ。どうせ内装同じなんだろうし。

背負っていたバッグから鍵を取出し、開錠する。

「おじゃましまーす」

「はいどうぞー」

ボタン、と音が響く。そのままリビングに向かった。

「じゃ、私着替えてくるからソファでも座ってて」

といって不自然に設置されてる扉を開けて行ってしまった。え、もしかして隣とつながってる？ 更にいらない高性能だな。

客室用とだけあって、無駄な物が一切ない。空調や家具が完備されているぐらいしかない。窓も、壁の一面がガラス張りとなっている。どうせ只のガラスじゃないんだろうが。防弾ガラス？ 免震ガラス？ その割には……薄そうだな。本当にどうでもいいが。

その後10分程部屋を見学してみた。客室なんだから問題ないだろう、と好き勝手に整理した。そしてその時。

「待ったー？」

と声と同時にさつき出て行つた扉が開かれ、顔を覗かせた。……

バスタオル姿で。

「いや特には……って、は？」

胸から膝までを一枚のバスタオルで巻いて、しかも湯気まで蒸散している。そのまま俺へと歩み寄り、肩を押さえて再びソファへと座ることとなった。

「え、なんでそんなに真顔なの？ 興奮とかしないの？」

「は、ほざけ。女の裸なんぞ、餓鬼の頃に見飽きてるから興味すらねえよ」

「ふうん」

目を一旦閉じ、半分開ける。いわゆる半目というやつだ。俺はそんな意味ありげなことはしたことが無い。

「じゃあ、これならどう？」

自分のバスタオルに手をかけ、一瞬にして取り払った。しかし予想通り、ちゃんと下に服を着ていた。細工に気付かれないように、さらしとショートパンツのみの着用。肩紐がある衣類だとこの細工をできない。

「ここまでやって、目を逸らそうともしないのね」

「だから言つたら、興味ないって」

「……そうね。じゃ、そろそろ本題に入ろつかしら」

俺の隣に腰を掛け、煙草を口にくわえて火をつけた。未成年の隣で吸うんじゃないよ、受動喫煙って言葉を知らんのか。

「うちの上層部、あの地の何かを狙ってるらしいの」
意味深に話し始める。

「あの地って、学園のことか？」

「そう。そしてわざわざ、生れ付き妖力を持つ^{デミホーム}亜人を任務に抜擢した。どういうことかわかる？」

「……その亜人を利用して、臨床実験をしようってか？」

「ま、そういうことよね」

白く染まった吐息が放たれ、数秒の沈黙。

「つか、お前が亜人だよな」

「そうよ。別に親族に妖怪がいるってわけじゃない、突然変異みたいなものよ」

「そうなのか」

「で、そっちは？　なんで派遣されたの？」

「俺も似たようなもんだよ。あの地の歴史や特異性を調べて上に報告するだけ」

「ふうん。……それより、隼君。いつになったら名前呼んでくれるのかしら？」

「……そっぴやそうだな。えと、出山さん？」

「今頃苗字？　名前で良いわよ、新菜で」

「……………新菜」

「……成立」

その直後、背に掛けていたソファが一瞬にして塵とかがしていた。

……*……*……*……*……*……*……*

・・・・・・*

「大丈夫？ 彩」

「なんとか大丈夫……」

2 時間目に集中砲火を喰らった後、3、4 時間目のコンピュータ演習は心ここに在らずの状態でキーボードの上にひれ伏していた。そして昼休み。何とか立ち直ったんだけど、まだ放心状態に近い状態にいる。

「お弁当食べないの？」

…… 梨子ちゃんが虐めてくる。

「食欲ないもん……」

折角お母さんが作ってくれたのに……

「じゃあ私が食べてあげる」

梨子ちゃんが私のカバンを開けて、お弁当を取り出す。

「…… 一口頂戴」

「食欲ないんじゃないの？」

「お腹空いたの！」

「ムキになんなくても……」

お弁当を取り返す。おかずの中から一番の好物の枝豆3粒を手に取り咀嚼。

「後あげる」

9 割以上の嶮が残っているお弁当を渡す。

「え、本当にいいの？」

「だってそんなに食べれないし、もったいないし、太るし」

「最後に本音が混ざってるね」

笑われた。笑い返してやった。

「…… はあ」

笑い終えて、机に俯せになる。

「隼君今頃何やってんのかあ」

塵とかしたソファの後ろには20cm角程に刻まれたダイニングテーブルが積み木と化している。

「な……」

驚嘆のあまり、声が出ない。乾ききった喉が声なき悲鳴を上げる。『助けて』。しかし誰かが助けに来るなんてありえない。もし来たとしても、勝ち目はないだろう。

「構える。さもなくば、死ぬぞ」

冷酷な声が空気を震撼させて脳に届く。全身の細胞が叫んでいる。逃げる。昨日の戦闘を見ただろう、急所に連続で攻撃を当てる技能^{スキル}。常人のそれじゃない。正に特殊訓練を受けた人間のものだ。本来ならば、俺を殺すことなんて造作もないことだろう。なのに、殺さない。遊んでいるのか、焦らしているのか。しかし、今の俺にはそんなことを考えている暇はない。今すぐここから離れる必要がある。

「なんで……こんなことするんだ？」

呼吸器を従う筋肉が緊張しているせいでうまく声が出せない。

「なんで？ 任務だからよ」

「に、任務だからって……」

「任務だけじゃない……！」

新菜の目に涙が浮かぶ。今までに見たことが無い、哀れみを象徴する涙。それは誰のためのものではない。

「……私の家族は、あの土地に殺された！ 私もその時に死ぬはずだったのに……私だけ助かった！」

その声は既に声ではなく、悲鳴だ。音がはっきりしている悲鳴。嗚咽、歯音混じりの悲鳴。

「それが許せない！ なんで私だけ助かったのッ？ 私と一緒に死にたかった！」

目は涙で埋もれ、今にも溢れそうな位溜まっている。落下音と同

時に新菜の足元に双剣が転がった。

「なんで私だけ……なんで……」

その場で蹲り、顔を両手で隠す。その間俺はいったん体制を戻し、語りかける。

「それじゃあ、なんでここにいるんだ？ あの土地が、嫌いじゃないのか？」

新菜は勢いよく頭を上げた。

「当たり前じゃない！ 私は元々FBI。FBIからスペツナズに潜入していたの、あの土地の情報を得るために。それなのに、スペツナズは何も情報を持っていなかった。そのせいで更にそこから派遣されて、ここに来たの。あなたの抹消命令を下したのもスペツナズ。あなたが転入した時に得たあなたの情報を上に報告したら、直ぐに命令が……」

しかしそれでは疑問が残る。なぜ彼女は翌日、つまり昨日俺を殺さなかったのだろうか。

「なあ、どうして……昨日殺さなかったんだ？」

「……………」

しばしの沈黙を得て、彼女の口が開いた。

「……あなたは、人を殺したことがある？」

「え？」

「人よ。殺したことがある？ 私は無いわ。なんの恨みもない人間を殺せるわけじゃないじゃない！ 射撃訓練だって、生き物を的にしているわけじゃないの！ 生き物相手に銃を向けられる？ CIAのあなたならはかるでしょ？ あなたは、情報のためなら生き物を殺せる？」

「それは……」

俺も、射撃訓練なら数十回やっている。警察以上の権力を持っている地位ならば、当然だ。しかし、生き物相手に銃口を向け、引き

金を傾けることはなかった。

「私はもうこんなことしたくない、誰かを傷つけることなんてしたくない……」

掠れる声で泣く彼女が物凄く遠くに感じた。

しかしその沈黙を解くように一人の人物が部屋に入ってきた。

マスター
主人……」

「……津島!？」

まさか津島までこちら側の人間なのか。

マスター
「主人がそこまで思い詰めていたなんて、存じ上げませんでした。申し訳ありません……」

マスターと言うのは新菜のことだろうか。俺がマスターなんて言われたことは無いし。

「申し遅れました、リバーバンク諜報官。私は我が主、エリリイ・L・ラディー捜査官が従う妖獣、デイルドウと申します」

「……………幼獣?？」

「いえ、幼い獣ではなく、妖^{あやかし}の獣と書く方です。FBI直轄の施設にて誕生、飼育されました」

なんでそんな最高機密情報がCIAに回ってこない! ……機密だからか? いや、そういう問題じゃないだろう!

マスター
「申し訳ありませんが、主人の精神状態が不安定なため、しばらく休息を取らせていただけますか?」

「あ、ああ、分かった。外で待つてるから」

「いえ、本国へ戻る為、しばらくは日本に帰ってこれないということです。学校の方へは私から伝えました。このことを知っているのは校長、教頭とあなただけです」

「え、教頭も? 一般人じゃないのか?」

「彼は校長の護衛を担当している、我が施設の三番目の妖獣です。知りませんでしたか?」

知らねえよ。知るわけないだろ。なんなんだよさつきから、俺をおちよくりやがって。

「既に渡航の手続きも済ませております。アメリカの滞在は2週間の予定ですので、ご安心ください」

「はあ」

最早何を言っているのかすらわからなかった。でもまあ要約すると、たった今発狂しちゃったもので、精神鑑定のためアメリカに戻る、ということだな。

「では失礼いたします。飛行機の出発時間まで3時間を切っていますので」

早いな！　せめて明日とかにすりゃいいのにさ。
嘆息。

「で、この荒れ果てた部屋はどうすりゃいいの？」

episode 11 (後書き)

今までは2000字強でupしていましたが、
これからは4000字程で更新しようかと思っています。
多分二週間おきぐらいになるかもしれませんが、><

「出山さんは、おうちの都合で——」

翌日の朝。真実を知らない逸水先生が、校長から言われた通りの良い訳で誤魔化していた。すべてを知っている俺からしてみれば、どうだって良いが。

あの後、結局部屋の掃除は俺がすることになった。部屋一面に埋め尽くされる綿や木屑の掃除、二次被害を被ったその他家具の修繕。本来なら謹慎二日目ははずの俺は、事情説明などのこともあり呼び出された。とは言っても、本当のことを何も知らない一般人に言えるわけもなく、そのまま謹慎免除となった。有難いのやら、面倒臭いのやら。

「ねえねえ、風岸君」

肩を小突く小さな圧力、細長い小さな指。突かれるのは良いが、少々くすぐったいのでやめてほしい。思わず変な声を出してしまいそうになった。

「うん？ えと、何、草御さん？」

妙なギャル気がある、茶髪セミロングで谷間が貧相な女子、と俺は認識している。草御さんより5cm位身長が低い瑞守さんの方が胸が大きい気がする。基準は知らないが。

「昨日、どこ行ってたの？ 夕方に彩と風岸くんの家に行ってみたんだけど、居なかったからさ」

昨日の夕方ということとは、俺が新菜の家の掃除をしていた時だな、管理人さんと一緒に。あれから3時間ほどずっとやってたし。

「あー、ちよつとな。外にいた」

「へー、自宅謹慎処分なのになえ……」

薄気味悪い、半分閉ざされた視線で俺を一瞥。なんか怖い。

「本当は何してたの？ …… 本当にナニしてたの？」

「……はあ？」

意味が分からない。

「何にもしてない、本屋とか色々回ってただけ」

「ふうーん、まあいいけどね。私にとっては」

今一度瞬き。

「でもね、彩にとっては一大事らしいわよ、気を付けてね」

「彩って、瑞守さん？」

「うん。彩とは幼稚園のころから一緒なんだけど、あんな彩を見たのは初めて。幼馴染兼親友として、あの子の成長に期待するのは当然な訳よ」

「はあ……」

今一よく分からないい。

「だからこそ、先に言っとくけど」

ここで草御さんの顔から笑顔が消える。

「あの子を泣かせたら只じゃ済まさないわよ」

.....
.....

そして昼休みに事件は起きた。

「やつと昼だ……」

終了のチャイムと同時に教室から出ていく教師を見送った後、教室は変装に包まれる。昨日の今日で精神的に限界だった俺は、授業を快く受ける気にはなれなかった。無論授業内容なぞノートに取っている訳はない。寝てたし。

寝たのが1時間目開始5分後で起きたのが4時間目終了5分前。今日が移動教室でなかったのが不幸中の幸い。……不幸中ってことは無いか。

状態を起こし腕を高く上げ肩の骨を鳴らす。

「食堂行くか」

立ち上がった教室を出ようとしたとき、

「あ、あの、隼君」

声が掛けられた。振り向くと絶賛話題沸騰中の瑞守さん。もしかしたら今一番会ったら拙い人物かも知れない。しかしその後ろにいる草御さんは「逃げんじやないわよ」的な感じで俺を睨んできている。ちよつと待ってくれ俺が何したんだ。

「き、昨日何してたの？」

目が今にも泣きだしそうな瑞守さん。しかしその隣にいる獣（草御さん）は今にも俺を喰らいついてきそうな位怖い。妖怪とかそういう次元じゃなくて、別の次元。

「えっと、本屋とかそういうところをうろついて……」

獣（草御さん）がいるから下手な嘘は付けない。もし嘘がばれたら食い殺されそうだし。CIAの癖に、とか思っている奴ら今すぐここに来い。この恐怖はどんな拷問よりも遥かに恐ろしく絶対零度よりも遥かに冷たいオーラに包まれているんだ。味わってみれば分かる、目の前に凶悪なT・レックスがいるようなもんだぞ。逃げようとした瞬間に命が終わる。

「じゃ、じゃあ、出山さんが何か関係してたりするの……？」

「え、新……や、出山さん？」

余りにもヤバい恐怖に包まれていては流石の俺にも動揺を隠せない。獣（以下略）と瑞守さんの睨みがピクリと反応し、獣はそのギラつく眼光がより険しくなつて、瑞守さんはもう溢れかえった涙が今にも零れ落ちそうだ。つか、マジで涙がすごいことになってる。表面張力はどうした何で目一杯に溜まってるんだよ何で流れねえんだよ。

「な、なんで今名前言いかけたの……？」

声が既に泣いている。ヤバい。今にも堤防が決壊して涙という濁流が俺を押し流しそうだ。

「そ、それはその……」

なんて言おうか。いや、でも嘘を言うで一瞬で蹴落とされそうだな。下手したら俺の首が吹っ飛びかねない。比喻ではなく。

しかし神は俺に味方したようだ。もちろん神なんて信じてないけど。なんの事情も知らない、あの時の男子メンバー4人が「食堂行こーぜ！」と言って、自身を流れと称して俺に突進、そのまま教室から押し出してくれた。これこそ不幸中の幸い。

.....
.....

取り残された私たちは、この胸くそ悪い感情のはけ口に困っていた。どこに向ければいい？ 窓ガラス？ 黒板？ ロッカー？

「梨……梨子ちゃん……」

涙をたっぷり含ませた彩の目は充血して、人間の物とは思えないほどに腫れている。

「大丈夫。私がなんとかしてあげるから」

「う……………うん……………」

抱きつかれて動けない私はポケットからハンカチを出して彩の涙を拭く……………前に彩が私の制服で涙を拭った。

「うええええん……………」

泣きじゃくる彩を抱えて頭をなでる。彩ってホントに……………胸大きいわね。お蔭で私のお腹……………鳩尾に胸が押し付けられて少し苦しい。……………負けてられない。

「何々どうしたの？ もしかして彩菜、隼君にフラれた？」

クラスメイトの声に反応して涙の量が増加する。私とそのクラスメイトを睨むと、蛇に睨まれた蛙の様に後ずさって逃げた。……………私ってそこまで怖い？ 確かに犬とか猫には無条件で懐かれたいし、前にナンパしてきた大学生を睨み返したら悲鳴を上げて退かれ、果

てには「い、命は……命だけは……ッ！」と言って正座までして命乞いしてきた。こっちこそびっくりしたわよ。

「ねえ、彩。こっち向いて」

「……………うえ？」

下から見上げてくる彩……凄く可愛い。異性の私まで惚れてしま
いそう……じゃなくて。

「彩は尻岸君の、どこが好き？」

「っえッ？」

素っ頓狂な声を上げて疑問を浮かべる彩。

「え……………ぜ、全部……………」

顔を真っ赤にして言ってくれる。私まで少し火照る。ぜ、全部か
あ。こりゃガチものだね。

「誰かに取られたくない？」

「うん……………」

「失くしたくもない？」

「うん……………」

これではつきりした。

「それなら私は全力で彩に協力する。邪魔する人も、尻岸君を彩か
ら奪おうとしてる人は阻止する」

自分の心の中の異物が理解できた。理解してしまった。

「だから、絶対あきらめないでね」

この異物は嫉妬だ。しかも、尻岸君に対するもの。でもこれは許
されないもの。

「う、うん……………」

何も知らない彩が嬉しそうになっこりと笑う。手で彩の髪を耳の
後ろへと回す。その感覚にくすぐったいように首をかしげる彩に、
私は羨む。

・・・・・*・・・・・*・・・・・*・・・・・*・・・・・*・・・・・*・・・・・*・・・・・

＊・・・＊

食堂まで強制敵に拉致られた俺は、さらに無理矢理に座らされた。

「っ痛っつっ……………」

着陸の瞬間に尾翼がイカれた飛行機のように尾骨が痛む。

「で、瑞守さんとはどんな関係なんだ？」

津島が言う。いや、そのほかの、隣や向いに座ったクラスメイトが俺へと身を乗り出して聞いてくる。

「え、いや、どんな関係でもないぞ。強いて言って友達みたいな？」
爆笑が生まれた。何がそんなにおかしい。

「隼ってホント鈍感だな。どう思われてるかもわからないか？」

鮎川が言う。

「だから、何の話だよ？」

こんどは落胆の声が渦を巻く。

「……………これじゃ瑞守さんも苦勞するな……………」

木下が言う。

「？」

首をかしげて疑問をあらわにする。別に演技とかじゃないが。

「ぶっちゃけ、瑞守さんのこと気付いてないのはお前だけだぞ、隼。クラスメイト全員しってるだろうし、下手すれば何れは学年全体の噂になる可能性があるな。いや、加害者だからこそ気付かないんだろうけど」

石田が言う。しかし何のことやら。全くもって理解できない。

「何度も言うけど、少なくとも俺らの間には友好関係しかない。それは断言できる」

その言葉を聞いて4人は更に嘆息したように俯く。失敬な。

「可愛そう過ぎるぞ、瑞守さん……………」

「だろうな……………」

「つか、こいつの目がマジで何も知らないって言ってるし」

「鈍感どころじゃねえぞこれ」

4人はいつの間にか俺を冷ややかな目で見ていた。止めてくれ。

「ま、いずれ何とかなるだろ」

「何か喰おうぜ、腹減った」

「俺は味噌ネギチャーシュー麺」

「んじゃ俺味噌カツ定食」

「隼何喰う？」

そのまま俺も流されるように「俺あ味噌野菜ラーメン」と注文する。

俺が入学初日から考えているいることは、

ここの学校の食堂には何故『味噌』が主題となってメニューが構成されているのかということだ。

episode 12 (後書き)

ちよつとラブコメを取り込んでみようかと思って書いてみたら、
ちよつとどころじゃなく、意味不明かつ理解不可能な地点まで
辿り着いちゃいました。誰か助けてください．．．．．

東京、新宿。漆黒に染まる空、その駅前に女がいた。背は低く、銀に染めた、腰まで届くロングヘア。瞳の色は水色で、服装は赤紫色のゴシッククロリータを象徴するようなものを着ている。周囲からは異分子を見るような視線が刺さる。其れもそのはず、右手には若干、いや異常な程逸脱している物が握られている。本のような、本でないもの。A4サイズで厚さは10cm程。表紙には日本ではまず使われない文字がびっしり埋められている。しかし、それだけではない。表紙が発光し、映像を浮かび上がらせている。立体映像ホログラムそれは科学で言う場合。

「目標はどうなった？」

冷たく、鋭い声が語りかける。しかしその質問に答えたのは人ではなかった。

「消滅しました。自然消滅ではなく、外界から作用を受けたようです」

本だ。声の方向にはあの本がある。

「ちつ。やっぱり人間霊は弱すぎて話にならないわね。もつと使える奴いないの？」

「やはり霊よりか妖怪の方がよいかと」

「バカ言つてんじゃないわよ、一般人に見られたら最悪どころじゃ済まないのよ？ 私が殺されるわ」

物騒な会話は周りの騒音に掻き消され、目立つことは無い。

「……誘き出すってのは？ とうにかできない？」

「奴らは監視対象の学園から長距離離れることはできません。学園の近くに誘うか、直接乗り込む方が手っ取り早いかと」

「そんな事してもし“アイツ”が起きたらどうするのよ、他に――」

「“アイツ”の制御は私にお任せください。貴女は奴らの排除をお願いしたいのです」

「……ふん」

会話は途切れ、歩き出す。手すりの近くまで近づくと、体が宙に浮き、まるでそこに階段があるかのように空中を登る。当然周囲から奇異の視線で溢れることになる。人間が宙に浮いているのだ。

「……あら、目立つちゃいけないんだっけ？」

眩きが奏でるメロディを旋律する。すると、さっきまで女を見上げていた視線は泳ぎ、果てにその混乱は喧噪に飲まれた。

「ヘンドレンス認識障害。結構世話になってるけど、便利よね」

e p i s o d e 1 2 ・ 5 (後書き)

ちよつとした、のちの物語につながるエピソードです。
来週文化祭中には次が書きあがるかと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9856w/>

Silent voice -声なき声-

2011年10月27日14時02分発行